

# 明恵の夢における動物の意味

唐澤太輔（IRCP 客員研究員）

**要旨：**華嚴僧・明恵坊高弁（1173～1232 年）は、19 歳の青年期から晩年の 58 歳まで、断続的に自身が見た夢を記録し続けた。彼は、実に様々な夢を記録しているが、本稿で焦点を当てるのは、動物に関する夢である。

明恵の夢には、非常に多彩な動物が登場する。しかし、それらを網羅的に捉え言及した研究はこれまでなかった。明恵の動物観あるいは非-人間への眼差しを知る上で、彼が見た動物の夢は大きなヒントを与えてくれる。同時に我々は、その眼差しが華嚴思想（事事無礙法界：事物と事物が豊かにつながり合う様態を重視する思想）と深くリンクすることを知ることができるはずである。

本稿では、まず、現在までに活字化され刊行されている明恵による夢の記録を概観し、そこから動物に関する夢を抽出しリスト化する。その上で、彼の夢に登場する動物の傾向を考察する。さらに、それらの動物が、明恵にとってどのような「意味」を持つものだったのかを論述する。最後に、明恵が経験した動物をめぐる共時的現象と華嚴思想とのつながりについて述べる。

---

キーワード：河合隼雄、井筒俊彦、ユング、事事無礙、シンクロニシティ

---

## はじめに

国宝『明恵上人樹上坐禅像』（高山寺蔵、13 世紀、伝恵日坊成忍（生没年不詳）筆）は、日本を代表する華嚴僧・明恵坊高弁（1173～1232 年、以下明恵）の人となりをよく表す逸品として広く知られている。坐禅入観する明恵の背景には、松、岩、藤などが描かれ、さらに小鳥やリスなどが配されている。二股に分かれた松の根元に坐す明恵は、穏やかな表情で瞑目し、「力みのない姿勢とともに、周囲の自然の中に無理なく溶け込んでいる」[大島：23] ように見える。この肖像画（坐禅像）において特徴的なのは、やはり小動物が丁寧に描き込まれている点であろう。心理学者の河合隼雄（1928～2007 年）は、「坐禅像にこのような小動物が配された図は、おそらく他に類をみないことであろう」[河合：157] と述べている。

かつて河合は、『明恵 夢を生きる』（京都松柏社 1987 年）において、明恵が記したいわゆる夢記<sup>1)</sup> や弟子が記したとされる伝記などを紐解き、ユング（Carl Gustav Jung, 1875～1961 年）の深層心理学からアプローチを行うという画期的な研究を行った。特に、明恵が見た女性に関する夢、つまり夢の中でどのように彼の女性像が変遷していったかについての議論は、ユング心理学における「アニマ」の問題と絡めて展開されており、他の追従を許さないほど精微な研究となっている。筆者が、明

---

<sup>1)</sup> 河合は、夢という内的世界に主体的に取り組んだ明恵を「「世界で最初の一人」という賛辞を呈し得る」[河合：14] と述べ、奥田は、その夢の記録である夢記を指して「日本精神史上稀有の書」[奥田 1978：139] と呼んでいる。

恵の夢記や伝記を概観した限りでも、やはり女性に関する夢は、赤裸々なセクシュアルな夢も含めて「特異」で、大変興味深いものだと感じられた。一方で、筆者が、その他に明恵による夢の記述の中で「特異」だと感じた事柄は、登場する動物の多彩さである。鳥、犬、馬、猿……あらゆる動物が彼の夢には登場する。これは、明恵の夢を考える際に無視することは決してできない事柄であろう。上述したように、明恵を象徴するとも言える『明恵上人樹上坐禅像』にも小鳥やリスが描かれており、やはり明恵と動物は、切っても切り離せない深い関係にあると思われる。

本稿の射程は、夢を通じた明恵と動物の関係の考察にある。以下ではまず、高山寺典籍文書総合調査団（代表者 築島裕）編『明恵上人資料第二』所収の「明恵上人夢記 高山寺蔵」（東京大学出版 1978 年、夢記と略記）と、奥田勲・平野多恵・前川健一編『明恵上人夢記 訳注』<sup>2)</sup>（勉誠出版 2015 年、山外本夢記と略記）に見られる、明恵の夢に登場する動物のリスト化を行う。前者は、従来、明恵の自坊であった高山寺が所蔵していたもので、後者は、高山寺以外に散逸していた明恵による夢の記述を集約したものである。本稿では、まず、両者における膨大な夢の記録から、動物の登場する夢を抽出（リスト化）し、その傾向を考察する。そして、それらの夢の中でも特徴的な動物の夢について、ユング心理学を援用しながら考察していく。さらに、明恵の伝記（高山寺典籍文書総合調査団（代表者 築島裕）編『明恵上人資料第一』所収「梅尾明恵上人伝記」（東京大学出版 1971 年、伝記と略記））などから、明恵と動物との間に生じた共時的現象（synchronicity）についてのエピソードについても言及する。その理由は、後で述べるように、筆者は、華嚴思想を研究する際、共時的現象の考察は避けて通ることのできない重要な事柄だと考えているからである。

## 1 明恵の夢における動物

明恵の夢において、登場する動物の多さは一体何を意味するのであろうか。それは、中世日本における夢に対する信仰を考察するだけでは、決して答えを得ることはできないものである。とは言え、明恵ほど精緻に、生涯にわたり夢を記録し続けた仏僧は日本史上ほとんどいないため、その数の多さを具体的に比較検証することは非常に難しいことでもある。

明恵は、夢を思い出し記録することにおいて、間違いなく「天才的な能力」[奥田 1978 : 124]を持っていた。例外的に、多聞院英俊（1518～1596 年）の残した『多聞院日記』には、彼によって数多くの夢が記されており、その日記を紐解くことで、明恵との比較は可能になるかもしれない。ただし、両者の夢の比較には膨大な時間を費やすと思われるので、それについては、今後の課題としたい。ここでは、あくまで明恵の夢だけに焦点を絞り、彼の夢にどのような動物が登場するのかを見ていくことにする。なお、ここで指す動物とは、龍や麒麟など空想上の生物も含む。またムカデなどの一般的には虫として扱われる、いわゆる節足動物も範疇に入れることにする。つまりここでは、植物を除く

<sup>2)</sup> これまで、高山寺外に存する夢記は、資料の点数が極めて多く、所蔵者も多岐に渡っており、調査研究上の障害が少なくなかったが、近年、奥田らが目録化し、さらにこの夢記の翻刻・訓読・現代語訳・語釈・考察を行い、2015 年に『明恵上人夢記 訳注』として公開した。[奥田 2017 参照]

人間以外の種全般を対象とする。

〈表 1：明恵の夢における動物〉

年月日	動物	夢の概要	出典・頁数
建久 7 年（1196 年）8 月～9 月頃	鳥（孔雀）	金色の大孔雀が二羽。明恵はこの孔雀より二巻の経を得ると思った。	夢記 pp.116-117
建久 7 年（1198 年）5 月 7 日	馬	明恵は、一頭の金色の大きな馬に乗った。馬は懐き明恵の手をそっと噛んだ。	山外本夢記 p.117
建仁 3 年（1203 年）11 月 16 日	龍	家の中で天・龍・夜叉が護衛していた。	山外本夢記 p.132
建仁 3 年（1203 年）11 月 19 日	鹿	御道場の中門に大鹿が子鹿を連れていた。明恵はこの鹿を飼った。	山外本夢記 p.135
建仁 3 年（1203 年）11 月 23 日	麒麟	磐石の上に麒麟がとどまっていた。	山外本夢記 p.145
建仁 3 年（1203 年）11 月 29 日	鳥	材木や雑物でできた大きな鳥。明恵は「材木なので倒れかかるに違いない」と思ったが無事であった。	山外本夢記 p.153
建仁 4 年（1204 年）1 月頃	馬	大水の夢。深さは馬の膝の節に至ったが、結局無事に対岸まで渡ることができた。	夢記 p.120
建仁 4 年（1204 年）1 月 12 日？	犬	明恵は、一匹の子犬を釣り針のようなもので苦しめた。	山外本夢記 p.285
建仁 4 年（1204 年）1 月 14 日？	鹿、猪、麒麟、馬麟	大河が溢れ、鹿や猪、麒麟や馬麟が川下に向かって去っていった。明恵は「猪と鹿は大明神・大菩薩の御使者である」と言った。	山外本夢記 pp.288-289
建仁 4 年（1204 年）1 月 30 日？	馬	明恵の縁者が馬に乗って過ぎ去っていく。馬のようなものでしかも馬ではないものが足を痛めていると思った。	山外本夢記 p.303
元久元年（1204 年）1 月 7 日？	犬	小さい犬たちが、獅子の像の下に集まった。	夢記 p.122
元久元年（1204 年）2 月 10 日	馬	糸野の護持僧二人が馬より落ちた。	夢記 p.122
元久元年（1204 年）9 月 11 日	鳥（鴿・雀）	紀州の庵室、湯屋。雀は灰の中に落ち、鴿は樹に居た。雀は死んだ。	夢記 pp.120-121
元久 2 年（1205 年）7 月 25 日	馬	一尺ほどもある角の生えた馬がいた。	山外本夢記 p.168
元久 2 年（1205 年）10 月 16 日	蛇、鼠・鼬、ムササビ	蛇が切れて死んだ。明恵は、鼠か鼬に殺されたのだろうと思った。ムササビが明恵の前を飛び去った。	夢記 p.124
建永元年（1206 年）6 月 6 日	魚（鰐）	海中に角の生えたサメがいて、明恵は、これは近々死ぬだろうと思った。	夢記 p.128
建永元年（1206 年）6 月 10 日	たこ？ 亀	たこのような生き物が家の中を動き回っていた。それを池に投げ込むと亀のような形になり沈んだ。	夢記 p.129
建永元年（1206 年）6 月 15 日	犬	明恵が乳鉢を持っていると白い犬がそれを欲した。	夢記 p.129
建永元年（1206 年）6 月 18 日	犬	白色と香の色の二匹の犬。後者の犬はとても愛おしい。白犬は火に入るが焼けなかった。	夢記 pp.129-130
建永元年（1206 年）11 月 14 日	鹿	明恵は、一頭の鹿の皮を首より下を剥ぎ取った。	山外本夢記 p.181
建永元年（1206 年）12 月中旬	ムカデ	ムカデが懐の中に入った。	夢記 p.132
建永元年（1206 年）12 月 28 日	魚	水の面に不思議な文様を描いた。その中に小さな魚が入り遊んだ。	夢記 p.133
建永 2 年（1207 年）5 月 29 日	象	白象に乗った帝釈天の夢。	山外本夢記 p.184
承元 3 年（1209 年）4 月 11 日	鹿	一頭の鹿が人語を解し様々な話をした。後に童子に姿を変えた。	山外本夢記 p.197
建保 2 年（1214 年）11 月 28 日	馬	文殊堂の前に馬が二頭いた。	山外本夢記 p.354
承久 2 年（1220 年）9 月 20 日	羊	大空に羊のようなものがあり、光るものや人体に変化した。	夢記 p.139

承久 2 年 (1220 年) 10 月 26 日	ムカデ?	大きなムカデのような虫が尼の手をさした。	夢記 p.141
承久 2 年 (1220 年) 11 月 13 日	猿	頭の大きな猿が懐いてきたので、坐禅を教えた。	夢記 p.142
承久 2 年 (1220 年) 11 月 20 日	馬	一頭の馬が馴れてきたが、少しも動かなかった。	夢記 p.142
承久 2 年 (1220 年) 12 月の夜	馬	馬が、外から坊にやって来た。	夢記 p.142
承久 3 年 (1221 年) 2 月 14 日	魚、亀	池の水が溢れ他の小さな池と繋がった。魚と亀はみな小さい方へ行った。	夢記 pp.143-144
承久 3 年 (1221 年) 5 月上旬	魚	清く澄んだ池の中から鰻のような魚が跳ね上がった。	夢記 pp.144-145
承久 3 年 (1221 年) 5 月 20 日	亀、蛇	二匹の亀が交合している姿の唐物があつた。唐女の人形は人の姿になった。蛇と通ずる女かと思った。明恵は「善妙は竜人にて又蛇身あり」と言った。	夢記 pp.145-146
承久 3 年 (1221 年) 8 月 18 日	馬	清く澄んだ池の中を馬に乗って遊んだ。	夢記 p.152
承久 3 年 (1221 年) 8 月 27 日	ミミズ	大きなミミズのいる夢。	夢記 p.152
承久 3 年 (1221 年) 9 月 12 日	蛭	蛭は次第に大きくなり、庭の中の草を食べていた。足が四本あり、顔は鳥のようであった。	夢記 pp.153-154
承久 3 年 (1221 年) 12 月 7 日	鳥(鶏)、馬	懷中に鶏の卵があり鳥の子が生まれた。また一頭の馬が鳴いた。	山外本夢記 p.243
貞応元年 (1222 年) 6 月 2 日	犬	一匹の黒い犬の夢。足にまとわりつき、明恵は「ずっと以前から飼っていた」と思った。	夢記 p.156
貞応 2 年 (1223 年) 5 月 23 日	鳥(ヒヨドリ)、鹿、うさぎ	ヒヨドリが五羽いた。他には鹿やうさぎがいた。取って懐に入れた。鹿は一頭逃げ去って行った。	夢記 pp.157-158
嘉祿 2 年 (1225 年) 6 月 1 日	魚(クジラ?)	摩竭魚(クジラ?)が次第に口を大きく開いた。またそれは足があつて明恵と一緒に並んで歩いた。	山外本夢記 p.255
嘉祿 2 年 (1225 年) 6 月 2 日	亀	懷の中の木亀が、木製であるにも関わらず生きていた。明恵は、この亀を飼おうと思った。	山外本夢記 p.258
嘉祿 2 年 (1225 年) 6 月 21 日	雨蛙? エビ?	雨蛙の子のように水の泡の中に生きているようなものがいた。それを火中に投げ入れるとエビのようであった。	山外本夢記 p.264
寛喜元年 (1229 年) 2 月 2 日	魚	底の深い淵の中で手で魚を捕らえた。魚は手から逃げなかった。	山外本夢記 p.274
寛喜 3 年 (1231 年) 3 月 11 日	馬	馬で大きな河を渡ろうとしたが、考えた末、自分の代わりに小児を馬に乗せた。	夢記 p.163
寛喜 3 年 (1231 年) 3 月 1? 日	龍	我が身が一尺ばかりの龍になった。	夢記 p.163
寛喜 3 年 (1231 年) 3 月 1? 日	犬、鮑	疲れた犬がいた。汚れてはおらず、自身の心の清浄さの表れと思った。懷に物があり出すと鮑だった。	夢記 pp.163-164
? 年? 月 19 日	魚のような石、鹿くらいの大きさの四本足の魚	眼のついた石が魚のようにピチピチ跳ねた。また、鹿くらいの大きさの四本足で背中が穴だらけの魚がいた。	山外本夢記 pp.314-315
? 年? 月 3 日	鼠、犬、牛	鼠が犬を食って逃げた。牛車で身分の高い僧が通り過ぎた。	山外本夢記 p.330
? 年? 月? 日	犬	黒犬が井戸に落ち死んだ。白犬は繋がれていたのに落ちなかった。黒犬は罪業、白犬は善と思った。	山外本夢記 p.340
? 年 5 月 7 日	馬	駿馬と美女の夢。	山外本夢記 p.365
? 年 6 月 1 日	鹿	鹿を飼育した。鹿は馴れていて驚かなかった。	山外本夢記 p.368
? 年 6 月 2 日	犬	黒犬が二匹いた。一匹を抱くが、捨てた。もう一匹は抱くこともしなかった。	山外本夢記 p.367

？年6月4日	鳥（トビ・雀）	トビが雀の子をとり、雀の子は悲しくて叫んだ。	山外本夢記 p.367
？年11月2日	犬	一匹の大きな犬が馴れて首を舐めた。	山外本夢記 p.382
？年7月1日	ムカデ	ムカデが脇息の上に来た。	山外本夢記 p.394
？年7月3日	ムカデ、鳥	大ムカデ、飛ぶ鳥の夢。	山外本夢記 p.394
？年？月19日	鳥（雀）	一羽の雀が人間に変化し、逃げ去った。	山外本夢記 p.403
？年？月19日	犬	一匹の黒犬が病気で苦しむ夢。明恵はこの犬を看病した。	山外本夢記 p.405
？年？月22日	蛇	ある人が蛇を持ちこれを枝にかけた。	山外本夢記 p.405
？年？月23日	犬、狐	犬を見たり狐がなく声を聞いたりした。	山外本夢記 p.414
？年？月24日	鳥（ホトトギス）	ホトトギスの子を押しつぶしてしまつたが蘇った。皆がホトトギスを呼んでいた。	山外本夢記 p.421
？年？月？日	蛇	明恵は縛られたが、その縄は小蛇だった。	夢記 pp.166-167
？年？月？日	鳥（トビ）	トビを頭の上に乗せて僧の格好をしている人がいた。	山外本夢記 p.432
？年？月？日	鳥（雀）	極端に小さい雀をつかまえようとしたら逃げ去った。色が薄く白かった。	山外本夢記 p.440

以上、夢記および山外本夢記から、明恵の夢に現れる動物と夢の内容をリスト化した。登場する動物の回数は、馬12回、犬12回、鳥（雀・トビなど）11回、魚7回、鹿6回、ムカデ4回、亀4回、蛇3回、龍2回、麒麟2回、鼠2回、馬鱗1回、蛸1回、羊1回、牛1回、鮑1回、雨蛙？1回、エビ？1回、蛭1回、象1回、ミミズ1回、鼯1回、ムササビ1回、猿1回、猪1回、狐1回となっている。ここからは、まず、明恵の夢において、馬、犬、鳥の登場回数が相対的に多いことが分かる。以下、第2～4章では、馬、犬、鳥が登場する明恵の夢にはどのような特徴があり、彼がそこで何を思考しようとしていたかを、河合によるユング心理学からのアプローチ<sup>3)</sup>、さらに井筒俊彦（1914～1993年）の華嚴思想研究を参照にしながら考察していく。

## 2 馬

馬は、当時の交通手段として欠かすことができないものであり、現代より人々に身近な動物であった。そのような意味でも、馬が夢に多く登場することはある程度理解できる。しかし、明恵の夢において、馬は単なる乗り物というだけではなく、意識と無意識に関わる重要な意味を持つものであった。

明恵の夢の中に様々な形で登場する馬であるが、彼は、この馬に乗って水に入る（入ろうとする）夢を何度か見ている。これは、彼の夢の中でも特徴的なものであり、非常に興味深い事柄だと思われる。例えば、建仁4年（1204年）1月頃〔夢記：120〕、明恵は、養父の前山兵衛良貞と一緒に馬に乗っていて、二条大路が出水ですっかり冠水してしまい、水の深さが馬の膝あたりまでくるとい夢を見ている。結局、夢の中で明恵は「広くは出でたれども浅かりけり」〔久保田・山口：56〕と思っ

<sup>3)</sup> 本稿において筆者は、明恵の夢を全てユング心理学に回収してしまうつもりはない。しかし筆者は、当時の夢信仰からだけでは理解し得ない明恵の夢における動物の（現代的）「意味」を捉える方法の一つとして、やはりユング心理学、つまり河合が行なったアプローチは非常に有効だと考えている。

て進み、無事、向こう岸まで辿り着けたという。

承久3年(1221年)8月18日の夢[夢記:152]は、清く澄んだ大きな池の中を、明恵が馬に乗り遊行しているというものである。そして、彼はふと「将に熊野に詣でむ」[久保田・山口:90]とひらめいたという。また、寛喜3年(1231年)3月11日の夢[夢記:163]で明恵は、馬に乗って大きな河を渡ろうとしたが、危険なので自分の代わりに小児を馬に乗せて、自らは歩いたという。

以上のように、明恵の夢における馬は、水と深い関わりがあることがわかる。では、明恵の夢において馬とは一体何を意味し、水(川や池)とは一体何を表象しているのだろうか。これを知るためのヒントは、承久3年(1221年)8月18日の夢[夢記:152]の末尾にある。ここで明恵は、「大きな池は禅観にして、馬は意識なり」[久保田・山口:90]と述べているのだ。禅観とは、いわゆる仏教における瞑想である。つまり、悠々たる水は、瞑想における深い精神的次元の象徴であり、そこから出ている馬は、自我ということであろう。つまり、これは、深い瞑想的次元に浸かりながらも未だ自我を滅しきれない(残している)明恵の心理状態を表しているとは言えないだろうか。また、先述した寛喜3年(1231年)3月11日の夢などからは、水という深い精神的次元は、思わぬひらめきなどを与えてくれる一方、小児など修行者以外が安易に覗きこむことは危険であることを、彼がかなり認識していたこともうかがわれる。

明恵の自我は、無我の次元へ足を入れながらも残されていた。明恵は、「大きな池は禅観にして、馬は意識なり」という言葉で、無我と自我の関係、そして自身の現在の在り方を端的に述べているのである。それは、彼の無我の境地へ入りきれないという修行者としての未熟さに対するある種の反省あるいは自戒かもしれない。しかし一方で、精神分析的には、このような自我が残っている状態は、非常に重要な意味を持つとされている。

深みに入っていくなさい。…(中略)…また退路も確保しておきなさい。あたかも臆病者であるかのように、注意深く進み、そうして魂の殺害者の機先を制しなさい。深みはあなたたちを完全に呑み込み、泥で窒息させようとしている。地獄に行く者は、地獄にもなる。それゆえに、あなたたちがどこから来たかを忘れないように。深みはわれわれよりも強い。…(中略)…深みはあなたたちをとどめておこうとし、これまでにあまりにも多くの者を元に返さなかった。[ユング:254]

このようにユングが述べる通り、無意識の(さらには、その深層にある普遍的無意識の)探求において、「退路」の確保は非常に重要な事柄であり、それを失ったものは、「深み」つまり「無」から戻れなくなり(統合失調症等の発症により)、いわゆる日常生活を送ることが困難になるのだ。また、河合は、夢の記録においては「無意識の力が強すぎて意識的な制御をこえている場合があり、危険を伴うことも」[河合:13]あると述べている。つまり、夢あるいは無意識を探求し続けた明恵は、強靱な精神力、言い換えるならば、現実世界への「退路」をしっかりと確保・獲得していたということ

である。

要するに、明恵の夢の中における水は、ユングの言う「深み」、あるいは無我の境地であり、そこへ完全に呑み込まれないように、彼はしっかりと自我を保っており、それが夢の中では、水に浸りながらも決して沈んだり流されたりしていない馬として表象されたということである。

### 3 犬

明恵による犬への愛着は並々ならぬものがあつた。それは、高山寺に残る木彫りの狗児（鎌倉時代、伝湛慶作、重要文化財）からも伺い知ることができる。これは、明恵が座右に置いていた遺愛の犬と伝えられている。この犬の色は（多少変色しているが）、どうやら黒だと思われる。そして、明恵の夢においても黒犬はしばしば登場する。

貞応元年（1222年）6月2日〔夢記：156〕、明恵は、一匹の黒犬が彼の足にまとわりついて離れなかつた夢を見ている。そしてその時、彼は「余、年来此の犬を飼へり」〔久保田・山口：94〕つまり「私は昔からこの黒犬を飼っていたのだ」と思ったという。しかし、門に出ると、この犬は消えており、明恵はどこへ行つたのだらうと思ひ待っていた。そして「今は相朋<sup>あひともな</sup>ひて離るべからず」〔久保田・山口：94〕と思ったという。

年月日が未詳〔山外本夢記：340〕ではあるが、明恵は、深い井戸の中に黒犬が落ちて死んでしまい、白犬は繋がれていたので落ちなかつたという夢も見ている。さらに、年末詳6月2日の夢〔山外本夢記：367〕では、黒犬が二匹おり、明恵はその内の一匹を抱いたが、すぐ捨て、もう一匹は抱くこともなかつたという。年月未詳19日の夢〔山外本夢記：405〕では、一匹の黒犬が病気で苦しんでおり、明恵はこれを「大事な犬」だと思ひ看病したという。

このように、明恵は何度も黒犬の夢を見ている。では、彼にとって、黒犬とは一体何を意味するものだったのだろうか。それは、年月日未詳の夢の記録〔山外本夢記：340〕に端的に記されている。そこで明恵は、「黒き犬は罪業なり、白き犬は善なり」〔山外本夢記：340〕と述べているのだ。つまり、明恵にとって黒犬は、罪業の象徴であつた。そして、さらに興味深いのは、明恵によるこの罪業を表す黒犬への感想や対応である。彼は、それを昔から飼っていたと思つたり、去つた後も戻ってくるのを待っていたり、抱いてすぐ捨てたり、看病をしたりしている。つまり、これらからは、明恵が黒犬への接近と離反の間で揺れている様子が伺えるのである。

罪業は、どんなに修行をしようとも、そう簡単に消し去ることはできないものである（だからこそ修業は一生続く）。このことは、明恵の夢における黒犬とまさに符合すると言える。罪業とは、黒犬同様、知らないうちに我とともにあり、つまりいつの間にか心に抱いており、また捨てたくとも簡単には捨てられないものなのである。人間である以上、それを完全に切り捨てられないのは、いわば「宿命」であり、むしろそれに目を配ることこそ重要なのだ。明恵は、それを「看病する」という形で夢に見ている。つまりこれは、明恵が、罪業を切り離すのではなく、自身の事柄として真摯に引き受け、切実にそして真剣に見つめていたということの意味するのではないだろうか。高山寺の木彫りの

黒犬が示すように、明恵が、白犬（善）より、黒犬（罪業）を座右に置いていたことは、彼が、常に驕り高ぶらず自身の罪業あるいは影<sup>シャドー</sup>に気づき、見つめることを忘れなかった証左である。

河合も、この「黒き犬は罪業なり、白き犬は善なり」[山外本夢記：340]の夢を、非常に重要視し、次のように述べている。

言ってみれば、すべての人はその心の中に黒犬を飼っているのだが、それに気づく人と気づかない人とは居るだけなのである。この犬は自分の犬だと気づくこと、それは「無力」の要素の存在に気づくことに他ならない。そこで「今は相朋<sup>あひともな</sup>ひて離るべからず」という明恵の決心が、大きい意味をもってくる。[河合：290]

つまり、誰しもが持っている（持ってしまっている）罪業に気づくことの重要性を、明恵がしっかりと認識していたことが、この夢からは読み取れるのである。また、河合がここで言う「無力」とは、顕在化されたもの、すなわち「有力」の基底をなす要素のことである。「有力」が積極的、顕現的、自己主張的、支配的なものだとするならば、「無力」はその逆である。「有力」な物事は見通しやすく、気づきやすい。しかし、目に映る「有力」の背後には、必ず「無力」が含まれている。分節化され顕現する「有力」的な物事は、絶対的無分節の「無力」を宿しているのだ。

井筒は、「有力」「無力」によるこの事態について、次のように述べている。

あらゆる分節の一つ一つが、そのどれを取って見ても、必ずそれぞれに無分節者の全体顕現なのであって、部分的、局所的顕現ではない。[井筒 1991：172]

この言説に従うならば、つまり、目に見える（「有力」な）どのような事柄も、それらは、目に見えない「無力」が分有されたものだということになる。また、井筒は、この分節化されたものと無分節のものを見通すことができる人を、イスラム神秘主義の言葉を借りて「複眼の士」と呼んでいる。

この「有力」の中に「無力」があることを知ることこそ、まさに華嚴思想で眼目とされるものである。この「状態」で見られた存在世界の風景を、井筒は「あらゆるものが深い三昧のうちにある」[井筒 2015：59]と言い、河合は「これが華嚴における「事事無礙」の法界である」[河合：219-220]と述べている。すなわち、明恵の黒犬の夢からは、黒犬といういわば「無力」を見通す重要性を、つまり華嚴の真実を、彼が象徴のレベルにおいても理解していたことが読み取れるのである。

#### 4 鳥

明恵は、犬と同様、鳥に関する夢も非常によく見ている。またその種類も、孔雀・鴿（土鳩）・雀・鶉・ヒヨドリ・トビ・ホトトギス……と多彩である。その中でも、雀に関しては4回見ており、彼の関心の高さが伺える。そして、その雀たちには、常にどこか「死」や「別離」といった物悲しさが付

きまっているのである。

例えば、元久元年（1204年）9月11日の夢〔夢記：120-121〕では、湯屋で、雀が灰の中に落ちてしまい、その雀は、取り上げた明恵の手の中で「死に了」〔久保田・山口：57〕るという結末を迎えている。

年末詳6月4日の夢〔山外本夢記：367〕では、トビが雀の子をとり、その雀の子は泣き叫んだという。つまり、雀の子は、親鳥から切り離され、トビの餌食になったのである。

さらに、年月未詳19日の夢〔山外本夢記：403〕では、明恵は一羽の雀を得たが、その雀は人間に変化し、逃げ去っていったという。可愛がろうと思っていた雀は、あっけなく明恵のもとから離れていった。

また、年月日未詳の夢〔山外本夢記：440〕には、不思議な一羽の小さい雀のことが記されている。足元にいた雀を、明恵は手に取った。これとは別にもう一羽雀がいた。この雀は、極端に小さく、色も薄く、白色をしていた。そして、この雀は飛び去っていったという。これは、極端に小さく色も薄いという、つまりその存在がもはや見えかかっているという、儚さというよりむしろ死を連想させる夢である。

明恵にとって、どうやら雀は、すぐに手元から飛び立ったり死んでしまったりする（あるいは死を連想させるような）非常に弱々しく儚い存在だったようだ。それ故に特に、抱き・匿い・守りたい対象でもあった。雀とは、一般的に見られる鳥類の中でも、最も小さいものでもある。この小鳥の代表格のような存在である雀が、明恵の夢に頻繁に出てくることは特筆すべき事柄であろう。

伝記によると、明恵は、いわゆるテレパシーのようなもので、雀の命を何度か救っている。例えば、以下の記述を見てみよう。

坐禅の中に侍者を召して云はく、「後の竹原の中に、小鳥物にけらるると覚ゆる。行きて取りさへよ」と仰せられけり。急ぎ行きて見れば、小鷹に雀のけらるるを追ひ放ちけり。〔伝記：282-283〕

〔久保田・山口：116〕

坐禅をしていた明恵は、深い瞑想状態に入っていた。その状態で明恵が見たのは、小鳥が何かに蹴られているヴィジョンだった。侍者を呼び、後ろの竹藪に行かせると、実際にそこで雀が鷹に蹴られていたという。そして侍者は、その鷹を追い払った。この出来事は、先述した年末詳6月4日の夢〔山外本夢記：367〕を彷彿とさせる。その夢では、トビが雀の子をとり、その雀の子は泣き叫んだことになっていたが、大きな鳥が雀を獲物として捕らえようとしている点では伝記の内容と一致する。他にも伝記には、以下のような記述が見られる。

或る時、夜深いけて炉辺に眠るが如くして坐し給へるが、俄に、「あら無慙や。遅く見付けて、はや食ひつるぞや。火を燃して、急ぎ行きて追ひ放て」と驚き仰せられけるに、前なる僧、「何事候

ぞ」と申せば、「大湯屋の軒のある雀の巢に、蛇の入りたるぞ」と仰せらる。深の闇にて有るに、怪しからずやと思へども、蠟燭急ぎ燃して行き見れば、はや鎧毛に生ひて、羽なんども生ひたる雀の子を、大蛇飲みかけて、巢に纏ひ付きたり。急ぎ取り放ちにけり。[伝記：283][久保田・山口：116]

眠るように坐していた（覚醒と睡眠の中間状態にいた）明恵は、前にいた僧に「急いで火を灯して追い払うように」と言った。明恵は、大湯屋の軒の雀の巢に蛇が入ったヴィジョンを見たのである。僧がその場へ行ってみると、実際に明恵のヴィジョンの通りであった。僧は、すぐに蛇を追ひ払い、雀を助けてやったという。この出来事は、元久元年（1204年）9月11日の夢[夢記：120-121]を我々に思い出させる。その夢では、雀は灰の中に落ちて死んでしまったが、その舞台は、伝記と同じく湯屋であった。では、このように明恵が、しばしば守ろうとした儚い存在である雀は、何を表象していたのであろうか。

明恵が、承久の乱（1221年）の際に多くの子女を匿ったり、高山寺境内に善妙寺を建て、そこに貴族の子女を収容したりしたことはよく知られている。鎌倉時代という武士によるまさに「力」が横行する戦乱の世において、腕力も体力も成人男性よりない子女は、その「力」になすすべもなく圧倒され、命を落としていた。それは、夢の中におけるトビや蛇に餌食にされる雀と重なりはしないだろうか。明恵による子女への特別な優しさの背景には、この「力」が渦巻く世の中で、儚く死にかけている弱き者を救いたいという切なる願いがあった。

## 5 考察

ここまで、明恵の夢において登場頻度の高い馬・犬・鳥が、彼にとってどのような意味を持っていたのかを考察してきた。それらをまとめると、以下のようになる。

明恵の夢において、馬と水はセットであることが多い。そして筆者は、第2章で、明恵の言葉を検証し、彼にとって、馬は自我を、水は無我の境地あるいは無意識を表していることを論じた。この事柄は、無我の境地を目指す明恵にとって、そこへ完全には到達することができないある種の苦悶であった。しかし同時に、精神分析的には、この彼の強靱な自我のおかげで、夢の世界に完全に呑み込まれることなく冷静に記録できたとも言えるのである。

明恵の夢に出てくる犬は、黒犬であることが多く、彼の言葉からは、それが罪業の象徴であることがわかった。そして筆者は、第3章で、明恵が黒犬を特に愛でたのは、彼が罪業を単に切り離すのではなく、我が身の事柄として引き受け、それを真剣に見つめていた証左であることを論じた。

多彩な鳥の中でも、雀が明恵の夢を特徴付けている。第4章では、雀にまつわる明恵の夢は、内容的にも儚く死を連想させるものが多く、これは弱肉強食の武士の世において、明恵が守ろうとしたか弱い子女たちと重なるということを述べた。

筆者によるこのような夢の「解釈」は、どこまでも「実証」ではなく、常に「可能性」の段階に留

まるであろう。ただし、重要な事柄は、高僧・明恵が膨大に書き残した夢<sup>4)</sup>に、我々現代人がどのような「意味」を見出せるかではないだろうか。それらを明恵個人の夢として切り捨てるのではなく、我々はそれらから、明恵の思想・思考の背景や、華嚴的な「意味」を紡ぎ出すことが重要ではないだろうか。そこから、様々な事柄は転回（展開）し出すのである。そもそも、明恵が単なる好奇心でこれほど多くの夢を書き残したはずがない。そこには、確実に「意味」があったはずである。

明恵は、ただ純粹に動物が好きで、その夢を見ていたという人もいるであろう。しかし、もしそうだとすると、この純粹にという点が極めて重要である。明恵の場合、それらはただ単に可愛い対象ではなく、自身と対称的な対象であった。つまり、明恵は、対象を自分自身と同格視できる 様態<sup>モード</sup>を持っていたのである。人間が優位（上位）で動物が劣位（下位）という非対称な状態では、例えば鷹に襲われそうな雀の声を聞くようなことなど決してできないであろう。彼にとって、動物は決して「畜生」として卑下すべき存在ではなかった。

明恵は、小動物だけを対称的に捉えていたわけではなかった。自身以外の存在すべて＝「自然」がそうであった。例えば、彼が、苅磨島に手紙を書いたというエピソードはよく知られているが、これは、つまり「彼にとっては、島も人も同等」[河合：158] だったことを示すものである。言葉や論理を突破して、明恵は非・人間との間に、相互浸透性を持っていたとも言える。そして明恵は、言葉や時間や空間といった人間を縛り付けている事柄を相対化し、ロゴスを超えた深いつながりの次元に入り込むことができたからこそ、共時的なヴィジョンを見ること（synchronicity）ができたのである。

第4章で述べたように、明恵は、雀が鷹や蛇に喰われる直前にそのヴィジョンを見ているが、これが本当であるならば、彼は、時間を先取りし、物理的空間を超え、雀による言葉ではない言葉を聞いていたからだと言える。この共時的現象を「事実」と見るかどうかは難しい問題であるが、華嚴的眞実であることは間違いない。つまり、事物と事物との自在無礙すなわち障壁がない浸透し合う豊かな状態こそが、華嚴の説く「事事無礙」であり、この「眞実」に明恵のヴィジョンはぴったりと当てはまるのである。

夢は膨大な時間の流れを刹那に収める。また、空間を自在に伸縮させる。さらに、種の壁を超えコミュニケーションを成立せしめる。そのような意味において、夢という現象は、極めて華嚴的であるとも言える。つまり、華嚴僧・明恵による動物の夢は、事事無礙法界（華嚴的眞実）を最もわかりやすい形でヴィジュアル化したものとも言えるのである。

## おわりに

「はじめに」でも取り上げたが、『明恵上人樹上坐禅像』は、まさに、明恵と非・人間との浸透状態を余すことなく表したものである。留意すべきは、浸透状態にあるとはいえ、それぞれが完全に融合

<sup>4)</sup> 前川によると、明恵は、自身の夢の記録を死後焼却することを弟子の定真に命じていたが、それを惜しんだ定真はそれを秘蔵し、彼の弟子の仁真に伝えた、つまり師の遺言に逆らって後世へそれを伝えたという[前川：344参照]。

することはなく、かろうじて区別を保っている点である。木々や小鳥やリスは、本来この絵の中心であるはずの明恵と同等に（もしかしたらそれ以上に）、綿密に描き込まれている。そこには、作者の異常なまでの力の込め様が見て取れる。そのため、本来この絵においてメインであるはずの明恵は、一見すると、その存在感は薄く見える。とはいえ、確実にそこに明恵は居る。つまり、「地」となるべき背景の自然と、「図」となるべき明恵が、事事無礙的に浸透し合っているのである。ここには「地」と「図」の反転どころか、「地」と「図」という概念も存在しない。あるのは、それぞれの浸透する「関係そのもの」なのである。この絵に「見方」があるならば、それは、明恵にフォーカスするのでもなく、周りの自然にフォーカスするのでもない。全体を一気に捉える「見方」である。

楽しげに木の間を飛び交う鳥も、可愛らしい栗鼠も、梢を流れるほのぼのとした彩色も、自然の中にとけこんだ人の心を表しています。が、あまり近づいて観察するのは止めにしましょう。それは絵の全体の美しさを損なうとともに、明恵の人間を限定することになりますから。[白州:13]

白州正子（1910～1998年）がこのように述べるように、自然（動植物）に溶け込んだ——それは完全な融合ではなく、いわばかろうじて個を保った混交——明恵の心、すなわち華嚴的眞実が、この『明恵上人樹上坐禅像』には表現されている。それを、我々が絵に近づいて、分析的に（分断的に）見ることは、明恵や自然を「限定」することにつながる。「限定」とは、すなわち、華嚴思想でいうところの「事法界」における捉え方である。この絵を眞に見るためには、「事法界」を超え、それぞれが優劣なく対称的に存在する「事事無礙法界」の捉え方が必要なのである。そして、それはシンクロニック（共時的）な捉え方でもある。

明恵は、夢の中で、動物と対称であった。そもそも夢は、そのような「在り方」を助長してくれる最適なフィールドなのである。そのようなフィールドで、我々は、動物から送られてくるメッセージを率直に受け取ることが可能になる。難しいのは、そこでの「出来事」を現実世界へとサルベージする時であろう。その時に、我々がもし、明恵のように自分以外の存在と対称的にある様態を身につけていれば、夢は単なる夢ではなく、現実とより深く関連した現象として捉えることが可能になるだろう。つまり、夢に登場する馬も犬も雀も、単なる夢の中のキャラクターではなく、それらは現実において「意味」のあるものの、いや現実そのものとなるのである。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費若手研究「南方熊楠と明恵の〈夢〉に関するデータベースの作成と比較思想研究」（18K12608）によるものである。

〈引用・参考文献〉

- 井筒俊彦「事事無礙・理事無礙—存在解体のあと—」『井筒俊彦全集 第九巻：コスモスとアンチコスモス』慶應義塾大学出版 2015 年
- 井筒俊彦『意識と本質』岩波書店 1991 年
- 大島幸代「山川草木のなかで夢をみる」公益財団法人香雪美術館編『明恵上人の夢と高山寺』公益財団法人中之島香雪美術館 2019 年
- 奥田勲『明恵一遍歴と夢一』東京大学出版 1978 年
- 奥田勲・平野多恵・前川健一編『明恵上人夢記 訳注』勉誠出版 2015 年
- 奥田勲「明恵上人夢記研究の現況と課題」荒木浩編『夢と表象—眠りとところの比較文化史—』勉誠出版 2017 年
- 河合隼雄『明恵 夢を生きる』京都松柏社 1987 年
- 久保田淳・山口明恵校注『明恵上人集』岩波書店 1981 年
- 白洲正子『明恵上人』講談社 1992 年
- 高山寺典籍文書綜合調査団（代表者 築島裕）編『明恵上人資料第一』（「梅尾明恵上人伝記」収録）東京大学出版 1971 年
- 高山寺典籍文書綜合調査団（代表者 築島裕）編『明恵上人資料第二』（「明恵上人夢記 高山寺蔵」収録）東京大学出版 1978 年
- 前川健一「明恵『夢記』は夢の記録以上の何物であるのか？」荒木浩編『夢と表象—眠りとところの比較文化史—』勉誠出版 2017 年
- ユング、カール・グスタフ著、河合俊雄・田中康裕・猪股剛・高月玲子訳『赤の書』創元社 2010 年
- Jung, Carl Gustav. 2009, *The Red Book* (English Translate Edition; Mark Kyburz, John Peck and Sonu Shamdasani). New York: Philemon Foundation and W. W. Norton & Co.